

仏教の立場から考える「宗教の役割」

曹洞宗総合研究センター

平 子 泰 弘

1. 宗教の役割と公益性

「宗教の役割」を考えるといった場合、まず「公益性」が出てくるものと思われる。近年、宗教の公益性が話題にもなっているが、筆者は宗教学者の洗建先生のいう「宗教であるということ自体を公益だとかんがえるべき」との論を基に考えていきたい。そして、宗教が人類に果たしてきた役割は、今までになかったような独自の世界観や価値観を示し、人間が生きる一つの方向性を人類に与えていくことにあるとの、基本的な宗教の社会に果たす役割も確認しておきたい。そこでは社会と統合し安定化させる機能（社会統合機能・社会維持機能）と、世俗的伝統的価値観を打破り社会を変革する機能（社会変革機能・チャレンジ機能）の2つの機能を持っていることも知られている。

近年日本の公益法人改革による影響により、多くの既存宗教教団が、公益性のある活動に取り組む動きが見られたが、先の考え方からすれば、本末転倒なものに映るであろう。こうした「宗教の役割」は社会的なものといえよう。

今回ここで考える「宗教の役割」は、より個人的なものとする。そこで仏教の考える「宗教の役割」とは何かと問うた場合、それは心の平安、精神的安定を得る、いわゆる「安心（あんじん）」を得るために存在すると答えられよう。

2. 日本に受け入れられていった仏教の歴史からみる「宗教の役割」

そこで、日本に受容されていった仏教の歴史をなぞりながら、そこでの宗教の役割を確認していきたい。ここでの考察は仏教の歴史や文化をつぶさに漏れなくみているものではなく、大きな流れとしてとらえていることをお断りしておきたい。

古代（飛鳥・奈良時代～）に、大陸から輸入される形で日本における仏教の歴史が始まるが、そのはじまりは、大陸の進んだ知識や技術と付随して、あるいはそのものとして受け入れられていったといわれる。そこでの仏教は渡来僧のもたらす土木や医療、天文など大陸の進んだ文化・技術としてみられていたといわれる。そして、仏教の教えや儀礼においても、祈祷儀礼による国家や国土の鎮護、除災、病気の平癒など、仏教の持つ先進な文化と特別な力により利益・安心を得ることができるとして受け入れられていったことがうかがわれる。

中世（平安・鎌倉時代～）になると、聖・三昧僧と呼ばれるような黒衣の僧（非官僧）による葬儀、供養が始まったとされる。そこでは、故き家族を弔いたいと願う人びとの思

いが大きくはたらいっていたことと、それに応える形で僧侶がそれを担い、各地に広がっていったと思われる。そこでの仏教式の読経・儀礼によって故人を落ち着かせ、成仏させるとともに、遺された人々のこころの安心をも与えるはたらきを持っていた。

近世（江戸時代）は、徳川幕府の政策により寺請制度が整備され、現在までその遺構を遺している檀家制度が確立した時代である。安定した時代とも云え、前時代に始まった僧侶による葬儀が広く一般的に定着していった時代である。新たな宗教的な動きや宗教家の発生などが顕著ではない時代ともとらえられているが、一方で授戒会の開催、富籤（とみくじ）、講、札所巡り、勧進（お札）などの信仰が流行した時代でもある。こうした流行は、人々の死後の安楽への願いや、現世での利益を求める強い思いが根底にあることが考えられる。

以上のように大ざっぱであるが、各時代における仏教の受け入れられ方をみていくと、いずれも不安を抱える人びとの心に「安心」を与える役割を担っていることがわかってくる。不安の種類や状況は異なるが、それぞれの不安をぬぐい取るための手段として仏教という宗教がはたらいっていたことが確認できるであろう。

3. 現代における仏教の役割

歴史的にさまざまな役割を担ってきた仏教の側面を確認したが、現代においてはどのような動向が確認されるか、近年の状況をあげて確認してみたい。

①現代の仏教を論じるとき、「葬式仏教」と揶揄される現実がまず挙げられる。そこでは、世間から職業として見られる僧侶、葬式しかしない寺院の存在がある。さらには僧侶自身も仕事と割り切って葬儀を行っているという自省すべき実状も垣間見られる。「葬式仏教」と批判を受ける理由には、葬儀自体がきちんとした中身（内容）を持たない所謂「儀式化」してしまったことが考えられる。もちろんこれだけではなく、その背景には地域社会の変化、家族形態の変容、葬儀社の増大、民俗の消失などのいくつもの要素が重なり合っただけの現状批判であることも考えられている。

②そのような中で近年、新書『葬式は要らない』のベストセラー化や、実際の葬儀の現場では「直葬」「家族葬」の増加や、「終活」「樹木葬」「手元供養」といった新たな動きが現れてきている。こうした動向は葬儀の意味の喪失や、供養の個人化といった新たな動きとしてとらえられているが、その根底には、葬儀そのものが持つ「宗教の役割」が喪失しつつあることが背景にあると考えられよう。

③また、冒頭に触れたように公益法人改革の影響も宗教教団をとりまく「宗教の役割」に関する問題として取り上げられる。各教団による公益性の高い事業の導入や促進、僧侶の活動範囲の拡充化の動きなどがみられたわけだが、この動きは先にも触れたように、宗教の存在自体が持つ本来の「公益性」を見失うことになりかねないものと考えられる。

④そして、ここ近年で最も大きな動きであり、宗教の役割を自他共にとらえ直す契機となったのが、東日本大震災の発生に対する教団や僧侶の活動である。そこでの活動は被災

者へのさまざまな活動が行われているが、大きくは被災地での救援ボランティアと犠牲没故者の葬儀・供養の二つが宗教者の活動として取り上げることができよう。この二つは宗教者として生者を救い、死者をも救う活動として「宗教の役割」を再確認することができたと考える。

・ボランティア活動

宗教者による被災地ボランティアは今回の東日本大震災を契機に始まったわけではなく、阪神淡路大震災時に始まったとされる。しかし当時は宗教者としてなすべき活動が何であるか、何が宗教者に求められているのかに答えることができずに終わってしまったといわれる。また背景には、オウム真理教による事件による宗教に対する社会的に懐疑的な空気もあったと言われている。しかし何より、宗教者として何をなすべきかの経験とノウハウの不足があったのであり、それを反省にその後各教団がボランティア活動について真剣に取り組んでいったこととその後さまざまな災害での活動により、自らがなすべき活動を見いだしていったと言えよう。

今回の活動では、被災者の「避難所」としての寺院、死者（遺骨）の「安置所」としての寺院、そして、被災者の心の声を聴く「傾聴者」としての僧侶、として寺院や僧侶がはたらきをみせている。特に僧侶は被災者の心に寄り添い、何を求めているか、いかにして相手の心をほぐすことができるかを考え、それにそって行動を起こしていると考えられる。

・葬儀・供養

多くの犠牲没故者（行方不明者）を弔い供養したい強い思いを遺族の方々が持つのは、今回のように突然に親しい者を喪った場合はより強いものであろう。突然に家族を喪った心に対し、それを徐々に受け入れていくために必要なプロセスとしての葬儀や、その後につづく供養が遺族にとって、せめて心を落ち着かせることのできる要素となってくるのである。葬儀や供養を営んでいくことにより、遺族の心を落ち着かせ、納得させていくはたらきをもつと考える。もちろん、それぞれの被災者の状況の違い、個人差などから死の受け入れに大きな時間差があり、感覚の違いによる衝突などさまざまな事例が報告されているが、それをも受け入れて個々に対応していけるのも宗教者の持てる役割を考える。そのような場でそれぞれの心の内をぶつけることができる相手としての宗教者、心を解放できる寺院という環境の必要さを改めて確認できたといえよう。

4. 今後の仏教における「宗教の役割」

最後に今後の仏教における「宗教の役割」を考えていくための視点を確認してみたい。まず、①檀信徒の布施により経営を支えられている寺院であることを第一に考えていけば、檀信徒が求めている役割・活動を考えそれに応えていく必要性が求められよう。次に、②教義を広め深めていく教団としての目的を考えた場合、それぞれの教義を現代人に対して「利」あるものとしてどのように示していけるか、各個人が宗教を信仰することにより得られるものをいかにして示していくかが課題となっていくであろう。また、③社会内存在

としてある教団・寺院・僧侶を考えた場合、それぞれの宗教の依って立つ宗教的真理を根幹に据えつつも、社会から求められる役割、地域社会の中での役割、僧侶の活動に求められるものをそれぞれが考え応えていく必要性があるのではないかと考える。

宗教は常に人びとにとって「活きている」ものである必要があり、それを失ったところに宗教の必要はなくなるのではないかと考える。各教団が己が「宗教の役割」を論ずることは、自らの教団の存在意義を論じていくことになっていくのではないか。